

句集

黄色い風

泉田秋硯

天下泰平とは言はねども浮寝

夜遊びの罰よと雪を急ぎけ

生きてゐて今日もよかりし蓮

曉夜の人怪しめば相手ま

毛虫焼く意地悪爺おぢいらしく焼

飯郁と匂ふ梅雨傘借り申

鮮やかな浴衣フェロモン発しけ

音もなき稲妻ばかり無尽

こほろぎのその渾身のレタイエ

吾も呵々柘榴も呵々と笑ひけ

ノベンバー黄色い風が駆けてゆ

酒気帯びてルバン気取りの冬帽

天下泰平とは言はねども浮寝鳥

向ふから爺にここにこと初鏡

初湯出てしばらく壮気曝しけり

右顧左眄しての中立餅を焼く

隕石の大爆撃を初夢に

水仙の匂ひも描くつもりなり

ユ
ダ
一
人
居
る
筈
雪
を
来
て
睨
む

夜
遊
び
の
罰
よ
と
雪
を
急
ぎ
け
り

バーボンの余勢を借りて鬼を追ふ

一畳を跳べし幅跳梅ひらく

野火の穂を勢子十人の百叩き

鶴を呼ぶボーイソプラノ鶴も啼く

痕跡も影も払拭雁かへる

パンジーを咲かせて空巢騒ぎとや

陽炎を見過ぎて猫の狂ひけり

尻餅の大きな楢円春の泥

百年を着た切りの雛納めけり

芽吹く樹を血潮の音が遡る

狂牛の肉も食おふぞ万愚節

富士山が噴火するぞと亀鳴ける

ぐい呑みに落花ひとひら浮かせ候

死ぬときはどうせ独りよ遠桜

盗み見て較べし釣果さくら鯛

花見船出る前からの大宴

離陸機の音澆刺と五月来ぬ

メーデー歌頑張る時のハモリ癖

石よりも固き草餅笑ひ仏

オムライスどう崩さうか子供の日

手
力
を
込
め
筍
の
鎧
剥
ぐ

げ
ん
こ
つ
の
後
の
懐
柔
柏
餅

陰陽おんみやうの呪咀かと聴けり青葉木菟

くちなはに靡きし草は焼き払ふ

三文も殖えぬ早起きほととぎす

暮去りぬ夕照ながく見透かして

完壁を競ひ老鶯老いゆくか

日本書紀混沌の章梅雨滂沱

ユダ以来おとおと神呼ぶ山開

紅よりも白のプライド百日紅

悪徳を見し眼を洗ひ髪洗ふ

滝仰ぐ個性の帽を阿彌陀にし

水高く撒きて機嫌の巨象かな

飢ゑ知らぬ世代ばかりや海泳ぐ

網重く水母大漁とは知らず

夜の秋やブル―に澄める食アペリテイフ前酒

眼裏にいまも焦土や広島忌

大夕焼犬も正座の姿勢にて

流星の遺痕をとこの迷ひ断つ

銀河にも奔流あるや目を凝らす

鉄を鍛^うつ火花に秋の詩ごころ

こほろぎのその渾身のレクイエム

稲妻にグラ
ランドピア
ノ艶めける

一葉落つ怒
りの後の虚
しさに

虫を聴く修正液で一句消し

秋燕の発ちて昂ぶり声も発つ

吾も呵々栢榴も呵々と笑ひけり

草虱いつぱい衿持どこへやら

盗賊の山分け気分栗の山

アリバイに鞆の中の栗を出す

しんがりの帰燕よ急げ日本晴

秋 薔薇 なほ 矍鑠 の 棘 鎧 ふ

ノベンバー黄色い風が駆けてゆく

立冬を思ひ知らせる波がしら

芒の穂胸に飾りしダンディズム

会話なく絵に描く筈の林檎剥く

風が
哭く
菊人形
の
自刃
の間

全山
の
かがよふ
紅葉
黙を強ふ

酒気帯びてルパン気取りの冬帽子

大股のビジネス歩き十二月

目くばせの以心伝心懐手

頑なに黄の冬薔薇を選びけり

梟に呼ばれて呼びて風邪心地

白杵まで死なばもろとも河豚ツア

生きてゐて今日もよかりし蓬餅

朧夜の人怪しめば相手また

毛虫焼く意地悪爺おぢいらしく焼く

馥郁と匂ふ梅雨傘借り申す

鮮やかな浴衣フェロモン発しけり

音もなき稲妻ばかり無尽蔵

煤
逃
げ
の
口
三
味
線
に
腹
が
立
つ

句集 黄色い風



発行 平成十七年三月二十日

著作者 泉田秋曜

発行者 田口恵司

発行所 株式会社 角川書店

〒100-0001 東京都千代田区富士見二―十三―13

電話 (〇三) 三三八一七―八五三六(編集)

編集制作 株式会社 角川学芸出版

印刷所 株式会社 熊谷印刷

製本所 株式会社 鈴木製本所